

英語教育と人間形成

On Teaching a Foreign Language —English— for Helping to Form an International Character

石 井 清
ISHII Kiyoshi

は じ め に

1949年以来これまで約40年程英語教育に携わって来た体験から、英語教育でどのような人間を作っていくのかということについてのべてみたい。

外国語の一つである英語教育は今、我が国では激動の渦中にあると言って良いだろう。日本の教育そのものが、現在激動の環境の中におかれているのだが、特に英語教育はそうであると思う。

さて世界には約4,000の民族がいて約5,000の言語があると言われているが、その中の一つである英語が、圧倒的に日本では学ばれている。これには色々な歴史的、政治的、経済的な理由があると思う。世界には約50億の人が住んでいるが、母語として3億5千万、第2言語として使う人びとが4億人、何とか通じる人が10億人、合計17億5千万人が英語を使用しているという現実があり、英語は国際的共通語としての条件を具えている。従って英語が実用性の高い外国語であることに疑問の余地はない。

「国際化」ということが盛んに言われている。日本に入ってくる外国人、外国へ出ていく日本人は、これらは年々増えている。法務省の発表(1989年9月30日)によると同年末までの1年間に日本人で海外に出るものは約1000万に達するだろう、同じく海外海外から来日する外国人に300万人に達するそうである。このことは国際交流の盛んなことを物語っている。このようないわゆる「国際化」の現状の中で外国語教育、特に英語教育の重要性が高まっていることは間違いのないと言える。

今英語教育はどうなっているか

本学では一般教育の中で第1外国語の英語が8単位、第2外国語のドイツ語かフランス語が4単位、合計12単位が必修科目で、これを取得しなければ卒業は認定されない。国際化時代だけにそれだけ重視されている。

今、特に学校教育の中で英語が問題になっているのは、国公立中学校での週3時間体制の問題である。戦後暫くは新制中学では英語は週5時間教えることができた。しかし英語は選択科目であったから、国語、数学、社会、理科、体育のような必修科目のように全員が学ぶことにはなっていなかった。しかし高校入試には英語が必ずあって、高校進学率は90%を超える状況になっているので、ほぼ全員が英語を学んできている。

さて、前述のような「国際化」の時代であるから、週4時間、5時間の英語を中学校で学ばせるのが当然と考えるのが常識であるのに、実は1981年から、学習指導要領に拘束される国公立中学校では週3時間しかやれない体制が、現場に強制されて来た。英語教師の民間教育団体によって組織される日本英語教育改善懇談会や有志の教師と親で組織された「国公立中学校英語週3時間に反対する会」(1981～)は署名数十万を集めてこれに反対し、また国際化の時代であるから英語を必修科目にせよという要求を国会や文部省に出して来た。しかし昨年(1989年)3月告示の新学習指導要領では週4時間やれる可能性は出て来たものの、依然として必修科目にはなっていない。そして、現行の週3体制は1993年まで続くことになっている。

しかしここに至る前に平泉渉参議院議員の「平

泉試案」(1974年)が提起され、英語は同年代の子供5%にやらせ、あとは必要がないという試案が出て英語教育界に大論争を引き起したことがある。週3体制はその流れを汲む考え方に沿う体制であると考ええる。事実私立中学校では週5~6時間の英語授業を行って来ている。

さて状況は一変する。1987年からJET計画(Japan Exchange and Teaching Program——語学指導等を行う外国青年招致事業)によって英語を教える外国人教師が多数、中学や高校の現場に配置されることになり、1989年には約2,000名、1991年には3,000名が中学、高校で日本人教師の助手として授業の指導に協力することになっている。(将来には、全国中学校全部に配置するという構想もあり、その時には10,000名以上の外国人教師が教えることになる。)これは良い意味でも、悪い意味でも我が国の英語教育に大きな影響を与えつつある。

実はこれは、現場の要求をうけて文部省がイニシアティブをとって始まった計画ではなく、海外に進出する企業側からの要請を受けて、通産省が提案し、自治省が金を出し、外務省が選抜の仕事にあたり、それをうけて文部省が教育の諸計画を立てて実施するというものであるから、現場の実態や条件とかみあわず、かなりの混乱と矛盾を引き起している。

英語の民間教育研究団体である新英語教育研究会は昨年(1989)の夏の全国大会で外国人教師(AET)についてアンケートを行い、273名(中学162、高校111)の回答をえたが、その回答の概要を下に示す。

1. AETについては継続賛成 183 (67%)
2. 生徒はAETを積極的に歓迎 136 (50%)
3. AETの評価すべき点
 - ① 生徒の興味づけになる 202 (74%)
 - ② 生徒のコミュニケーションについての自信を持たせる 116 (42%)
 - ③ 教師の研修の場となる 134 (49%)
4. AETの問題点
 - ① 打ち合わせ時間が保障されていない 173 (63%)
 - ② クラスが大きすぎる 163 (60%)
 - ③ 進度が遅れる 102 (37%)
5. AET制度の改善すべき点

- ① 打ち合わせ時間の確保 191 (70%)
- ② クラスサイズの縮小 172 (63%)
- ③ 教材作成への参加 99 (36%)

以上からAET制度についての現場の教師の感想や要求の大まかな傾向が察知できるが、AET導入による現場での混乱と矛盾解決の道は現場の実態や教師の要求を十分考慮に入れることから始まらねばならないと考える。現状では莫大な費用のみならず人材の無駄使いは避けられないし、あわせて外国人教師の日本に対する不信感を抱かせる恐れさえもあると思う。

外国語教育への姿勢

ここで、日本の英語教育の歴史を概観しよう。アメリカ海軍提督ペリーひき入る黒船の浦賀来航(1853年)が英学必要の衝撃を時の政府徳川幕府に与えたことは当然と考えられる。日本史年表(歴史学研究会編、岩波書店刊)によれば、黒船来航の年(1853)の11月に「中浜万次郎が幕府に登用」、1855年には「(幕府は)洋学所を建て」、翌1856年に「洋学所を蕃書調所と改称」、1860年には「旗本らに外国語学習の奨励」があり、さらに明治維新の年(1868)には「福澤諭吉、英学塾を芝に移転、慶応義塾と改称」と出ているのが示唆的である。

明治の初期から、太平洋戦争の終わりまで、おおづかみに言うと英語教育は極めて限られた生徒、学生にしか与えられなかった。一方、戦後から今日に至るまではほぼ全ての子どもが英語を学ぶことになっているのは大いに評価できることである。

明治の初期には大学などでは(東京大学(1877~)の前身、昌平校が大学となったのは1869年)英語は英米人教師に習った。岡倉天心(1863~1913)や夏目漱石(1867~1916等はそういう学生で、この二人は東京大学で学んでいる。(漱石は東京大学の英文科第3回卒業生として明治26(1893)年に卒業している。卒業生数は1名であった。)従ってこの当時の学生は読み、書きばかりでなく、聞き、話す力も堪能であった。天心は英語でThe Book of Tea(茶の本)、The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan(東洋の理想)、The Awakening of Asia(アジ

アの目覚め)を著わしているし、漱石は後にロンドンに留学し、その後英語教師として東大文学部イギリス文学科で教えている。

これらの明治初期の英学にとりくんだ福澤諭吉、岡倉天心そして夏目漱石の欧米観についてふれて見たい。またそれは彼等が日本や東洋の社会、文化をどのように見ていたかともつながっていくと思う。

当時、自然科学、科学技術の面では日本が欧米のそれにひどく劣っていたことは言うまでもない。当時の人びとはそういう事柄に対して恐怖心すら持っていたであろう。従って欧米崇拜の念が強かったのは止むをえないことであつたろう。そのことは福澤諭吉が時事新報に書いた論説「脱亜論」⁽¹⁾(明治18年-1885)からも推察できる。「入欧脱亜」という言葉が当時作られた。それは次のようなことを意味している。日本の国が世界一流の国となるためには、時代遅れで、頑迷固陋な朝鮮や中国は見捨て、たもとを分けて、欧米の文明、文化を大いに取り入れて、欧米に仲間入りすべきであるという論である。これは近隣のアジア諸国を軽視し、欧米を過大評価するもので、今日の国際観に立って考えるなら、手厳しい批判を受けてしかるべき考え方と思われる。福澤諭吉の名著「学問のすすめ」(1872年)の冒頭を飾る「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。……」という民主主義の原点とも言うべき言葉を残した福澤にしても時代の限界を超えることはできなかったのであろうか。明治政府を批判しながらも、その富国強兵策を支持する論に傾いていったのは心残りのことであった。

明治政府の富国強兵の基本政策については夏目漱石は冷静な批判的な目を持っていたと言えるように思う。一例を上げると彼は名作「三四郎」⁽²⁾(明治41-1908年)の中で、小説中の人物広田先生の口をかりて、日露戦争(1904~5年)の勝利に酔う状況にあって、その日本について「亡びるね」と言って、質問をした学生三四郎を驚かしているが、富国強兵策の終着点を見すえていた漱石の鋭い目は流石であると思う。

日本の美術、東洋の美術の良さ、人間的やさしさ⁽³⁾、奥深さに自信を持ち、これらを限りなく愛した岡倉天心が英語で書いた「茶の本」は今もその

素晴らしさによって内外の読者に深い感銘を与えるが、富国強兵策やその考え方にかかわって言えば、「茶の本」(明治39-1908年)では次のようにのべている。「西欧の人は通常、柔和な平和的な芸術に打ちこんでいる時には、日本を野蛮国だと見なしたものだ。所が日本が満州の戦場で大量虐殺を犯し始めた時文明国と言っている。」彼は平和主義者で、人間の文化や東洋の心について深い感受性、思想を持つ人であった。国際化、国際交流の時代において、このような先人の考え方を学ばねばならないし、若い人々に伝えなければならないと思う。富国強兵的傾向が強まりつつある今日、私は特にそう思う。

さて、日清戦争(1894-5年)、日露戦争(1904-5年)に勝ち、第一次世界大戦(1914~8年)に勝利国となり、日本は富国強兵の意味で一流国にのし上っていった。それと共に英米語に対する態度が変わっていった。特に軍部それも陸軍は英語を敵性語と見る考えが強まり(昭和10年代の後半)、それは文部省の教育政策等に大きく反映するようになる。日本語の中に生活用語として溶けこんでいた英米語を追放するようになっていった。例えば、アメリカ生まれの野球そのものを追放できなかったのは片手落ちだったが、野球用語から英語が追放された。「ストライク」は「よし」、「ボール」は「駄目」、「ヒット」は「安打」、「アンパイア」は「審判員」と言わねばならなかった。音楽用語では「オルガン」は「足踏み音出し器」、「サクソフォン」は「竹べらつき吹き鳴らし」と言わせた。陸軍では「カレーライス」は「から味入り汁かけ飯」と言わせたのである。正に狂気の沙汰であった。私の体験について言えば、陸軍の幹部候補生の試験を受けた時、試験官の陸軍大佐殿から英文科の学生であった私は「何故お前は英語を学ぶのか」と尋ねられたことがある。私は「敵を知り、己れを知らば百戦あやふからず」(孫子の兵法書の一節)と答えて叱責の難をのがれたことを覚えている。そういう風潮であった。昭和19年頃のことである。このような外国語観、外国語教育観が誤っていることは今日から見れば明白であるが、当時はそれがまかり通ったのである。

逆に戦後、平川唯一氏のカムカムエブリボディ(NHK英会話番組)に示されるように、民族的

自尊心を傷つけるような風潮も見うけられた。1960年の日米安保大闘争の頃は、我が国の英語教育は元占領国の支配体制の維持強化に貢献する英語教育になっているのではないかと悩む英語教師の多かったことも事実である。私はすべての国、民族はそれぞれお互い平等であって、相互尊重するのが基本であると思い、そういう立ち場で外国語教育をしていかねばと思っている。アメリカの独立宣言（1776年）の中のAll men are created equal.（すべての人間は創られて平等である）の言葉もよいが、ベトナム独立宣言（1945年）の中のAll peoples on earth are born equal.（世界のすべての民族、国民は生まれながら平等である）は外国語教師として深く共感する。

所で、現在の我が国の英語教育は今までのべて来たような様々な問題や悩みを引きずり乍ら進んで来ているが、受験体制が我が国の英語教育をゆがめ、バランスのとれない異常なものにしていることも事実である。

この国際交流の盛んな時代、「国際化」が言いたてられているこの時代にどのような目標を英語教育は目指すべきであろうか。

外国語教育と人間形成

外国語教育によってどのような人間形成を目指すかということだが、それは、教育基本法の前文と第一条に明記されている。その趣旨は次のようになるだろう。

1. 世界平和と人類福祉への貢献
2. 民主的で文化的な国の建設
3. 人格の完成
4. 真理、正義、個人の価値、勤労、責任を尊重する人間の育成

そして外国語教育では特に国際理解によって世界の平和と人類福祉に貢献できる人物を育てることであると思う。

そのことを極めて明確に総合的に示しているのが、ユネスコ（UNESCO＝国際連合教育科学文化機関）による次の2つの勧告であろう。

1. 中等学校での外国語教育に関する各国文部省への勧告（1965年）
2. 国際理解（国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教

育）に関する勧告

この2つの勧告の要点を紹介する。（正確なる全文は原文に当てはしい。）

前者では、前文に次のように（要旨）のべる。

- ① 現代外国語の知識は生徒の総合的な文化的及び知的訓練の一部であり
- ② 高度な学問分野の広く深い研究に不可欠な手段である。
- ③ どの現代外国語を選ぶかはそれぞれの国民自身による。
- ④ 現代外国語が話される国の文学、歴史、文明、生活用式の知識が国際理解及民族間の合意の向上に大きな影響を及ぼす。
- ⑤ あらゆる分野の国際関係の発展と輸送通信手段の充実により、少なくとも一外国語の知識及びその言語を自在に使える実的な必要が高まっている。

以上の諸点をふまえて勧告を行っている。

外国語教育の目標

- ① 現代外国語を教授する目標は教育的であると同時に実用的である。
- ② 現代外国語の教授はそれ自体が目的でなく、その文化的及人間的側面によって生徒の知性と人格を訓練するのに役立ち、国際理解の向上と民族間の平和で友好的な協力の確立に貢献すべきである。

2. 国際理解教育に関する勧告（1974年）

この勧告についても、その一部のみ紹介する。国際理解教育の指導原則

- ① 教育に国際的側面及び世界的視点を持たせる。
- ② すべての民族並びにその文化、文明、価値及び生活様式に対する理解と尊重。
- ③ 世界的相互依存関係が増大しているとの認識。
- ④ 国際的な連帯及び協力の必要についての理解。
- ⑤ 他の人々と交信する能力。
- ⑥ 個人がその属する社会、国家及び世界全体の諸問題解決への参加を用意すること。

以上、ユネスコによる2つの勧告で特に重要と思われる所を紹介したが、勧告を通読して、その内容は人類の歴史的体験から生まれた英知の結晶

であると言えよう。このような目標や原則に従って外国語教育がすすめられねばならないと思う。

英語教育における実践的指導法について

さて、今までのべて来た国際人の人間形成を目指す英語教育を実践的に具体的にのべたいが、この論稿では、極めて概括的に記すにとどめ詳しくは、拙著「未来を創る高校英語の授業」(1987年三友社刊)に譲りたい。

指導における第1の原則は良い教材を用いるということである。

良い教材の例

1. Shooting an Elephant by George Orwell (1903 ~ 50).
 2. Animal Farm by George Orwell.
 3. Lumumba's Will by Patrice Lumumba (不詳~1961).
 4. Has Man a Future by Bertrand Russell (1872~1970).
 5. War Crimes in Vietnam by Bertrand Russell.
 6. Religion and Science by B. Russell.
 7. Seibei's Gourds by SHIGA Naoya(1883~1971).
 8. Declaration of Independence of Vietnam (1945).
 9. A Tune on Ashifumi Otodashiki (1973年5月頃のMainichi Daily Newsの社説)
 10. The Story of My Life by Helen Keller (1880 ~ 1968).
 11. I Have a Dream by M. L. King(1929 ~ 1968).
 12. The Concluding Speech of "The Great Dictator" by Charles Chaplin(1889~1977)
 13. The Crazy Ape by Albert Szent-Györgyi (1893 ~ 1986).
 14. Of Human Bondage by Somerset Maugham (1874 ~ 1965).
- ② 民主主義(人権思想)の理解を深めるもの
3、8、11、12等がそれに当る。
 - ③ 国際理解を深めるもの
1、3、11、12、13
 - ④ ヒューマンイズムの感動と理解を与えるもの
10、12
 - ⑤ 科学的なものの見方を養うもの
4、6、13
 - ⑥ 芸術性の高いもの
1、2、7、10、11、12、14
 - ⑦ 深く考えさせるもの
1、2、4、5、6、11、12、13
 - ⑧ 現代の問題にかかわりの深いもの
4、5、9、13
 - ⑨ 歴史の見方を深めるもの
1、4、6、7、8、9、11、12、13
 - ⑩ 興味深いもの
7、9、10、14
 - ⑪ 発達段階にふさわしいもの
7、14など

指導における第2の原則は自己表現を重視することである。

我が国の英語教育はこれまで受験体制の中で、与えられたものを理解し、覚えることに重点がかけられ、特に語学とは暗記であると思う傾向が生徒や学生に強い。このような受身的学習を積極的な自主的な学習に切りかえるポイントは自己表現である。

これは、習った語彙、構文を使って生徒や学生が自分の感動、考え、主張、意見、願い、希望、要求、自分の生活等を話したり、書いたりする学習活動である。

自己紹介の教材が出てくれば、それを他人の事として学ぶのではなく、自らもそれにならって自己紹介文を英語で作り、書いたり、発表したりするのである。

私は英作文の授業に発展させて、スピーチの原稿を作らせ、仲間のクラスメートの前で発表させる実践を数多く重ねて来たが、生徒が受身的ではなく、積極的に参加する充実した授業を実現することができた。詳細は省略する。

第3の原則は集団学習である。これはクラス集団、班を編成している場合はその班集団の構成員

良い教材の条件と質

① 平和を重視するもの

上の教材から番号で示すならば、4、5、12、

13

の一人ひとりの学力をできるだけ発表、交流させ、集団の協力で、孤立した個人の力では獲得のできない高く、大きい学力を獲得させる指導法である。基本的な考え方は日本古来の諺のいう「三人よれば文珠の知恵」の内容するものであり、江戸時代の蘭学者杉田玄白等が蘭書「解体新書」を集団学習で解説した（1774年）あの学習法を貫く考え方である。

おわりに

この論稿は昨年12月に本学で行われた公開講座でのべた内容を骨組みとし、それに多少の補足をしたものである。なお、公開講座では神津善三郎学長に出席を頂き、若林和正教授が司会の労をとられた。両先生の御退職に当り一層思い出の深い講座となった。

（1990. 4. 26 受理）

資料

① 福澤諭 吉 著

「脱亜論」より

世界交通の道、便にして、西洋文明の風、東に漸し、到る処、草木も此風に靡かざるはなし。蓋し西洋の人物、古今に大に異るに非ずと雖ども、其挙動の古に遅鈍にして今に活潑なるは、唯交通の利器を利用して、勢に乗ずるが故のみ。故に、方今東洋に固するものゝ為に謀るに、此文明東漸の勢に激して之を防ぎ了る可きの覚悟あれば則ち可なりと雖ども、苟く世界中の現状を視察して、事実には不可なるを知らん者は、世と推し移りて、共に文明の海に浮沈し、共に文明の波を揚げて、共に文明の苦楽を与にするの外ある可らざるなり。

文明は猶、麻疹の流行の如し。目下東京の麻疹は、西国長崎の地方より東漸して、春暖と共に次第に蔓延する者の如し。此時に当り、此流行病の害を悪て之を防がんとするも、果して其手段ある可きや。我輩断じて其術なきを証す。有害一偏の流行病にても、尚且其勢には激す可らず。況や利害相伴ふて、常に利益多き文明に於てをや。當に之を防がざるのみならず、力めて其蔓延を助け、国民をして早く其氣風に浴せしむるは、智者の事なる可し。

西洋近時の文明が我日本に入りたるは、嘉永の開国を発端として、国民漸く其探る可きを知り、漸次に活潑の氣風を催ふしたれども、進歩の道に横はるに古風

老大の政府なるものありて、之を如何とす可らず。政府を保存せん歟、文明は決して入る可らず。如何となれば、近時の文明は日本の旧套と両立す可らずして、旧套を脱すれば同時に政府も亦廃滅す可ければなり。然ば則ち文明を防て其侵入を止めん歟、日本国は独立す可らず。如何となれば、世界文明の喧嘩繁劇は、東洋孤島の独睡を許さざればなり。

是に於てか我日本の士人は、国を重しとし政府を輕しとするの大義に基き、又幸に帝室の神聖尊嚴に依頼して、断じて旧政府を倒して新政府を立て、國中朝野の別なく、一切万事西洋近時の文明を採り、独り日本の旧套を脱したるのみならず、亜細亞洲の中に在る新に一機軸を出し、主義とする所は唯脱亜の二字に在るのみ。

我日本の国土は亜細亞洲の東辺に在りと雖ども、其国民の精神は、既に亜細亞洲の國體を脱して、西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは、近隣に國あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二國の人民も、古来亜細亞洲の政教風俗に養はるゝこと、我日本國民に異ならずと雖ども、其人種の由来を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも、遺傳教育の旨に同じからざる所のある歟、日支韓三国相對し、支と韓と相似るの状は、支韓の日に於けるよりも近くして、此二國の者共は、一身に就き、又一國に關して、改進の道を知らず、交通至便の世の中に、文明の事物を聞見せざるに非ざれども、耳目の聞見は以て心を動かすに足らずして、其古風旧慣に恋々するの情は、百

千年の古に異ならず。此文明日新の活劇場に、教育の事を論ずれば儒教主義と云ひ、学校の教旨は仁義礼智と称し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、其実際に於ては真理原則の知見なきのみか、道德さへ地を払ふて殘刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し。

我輩を以て此二國を祝れば、今の文明東漸の風潮に際し、進も其独立を維持するの道ある可らず。幸にして其國中に志士の出現して、先づ國事開進の手始めとして、大に其政府を改革すること我維新の如き大舉を企て、先づ政治を改めて共に人心を一新するが如き活動あらば格別なれども、若しも然らざるに於ては、今より數年を出でずして亡國と爲り、其國土は世界文明諸國の分割に歸す可きこと、一点の疑あることなし。如何となれば、麻疹に等しき文明開化の流行に遭ひながら、支韓兩國は其伝染の天然に背き、無理に之を避けんとして一室内に閉居し、空氣の流通を絶て窒塞するものなればなり。

輔車唇齒とは、隣國相助くるの喩なれども、今の支那朝鮮は、我日本國のために一毫の援助と爲らざるのみならず、西洋文明人の眼を以てすれば、三國の地利相接するが爲に、時に或は之を同一視し、支韓を評するの偏を以て、我日本に命ずるの意味なきに非ず。例へば、支那朝鮮の政府が古風の專制にして、法律の恃む可きものあらざれば、西洋の人は、日本も亦無法律の國かと疑ひ、支那朝鮮の士人が感溺深くして、科学の何ものたるを知らざれば、西洋の学者は、日本も亦陰陽五行の國かと思ひ、支那人が卑屈にして恥を知ら

ざれば、日本人の義侠も之がために掩はれ、朝鮮國に人を刑するの慘酷なるあれば、日本人も亦共に無情なるかと推量せらるゝが如き、是等の事例を計れば枚挙に遑あらず。之を喩へば、比隣軒を並べたる一村一町内の者共が、愚にして無法にして、然かも殘忍無情なるときは、稀に其町村内の一家人が正當の人事に注意するも、他の醜に掩はれて埋没するものに異ならず。其影響の事実に現はれて、間接に我外交上の故障を成すことは実に少々ならず、我日本國の一大不幸と云ふ可し。

左れば今日の謀を爲すに、我國は隣國の開明を待て共に亞細亞を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明國と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も、隣國なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ。惡友を親しむ者は、共に惡名を免かる可らず。我れは心に於て亞細亞東方の惡友を謝絶するものなり。

(明治十八年三月十六日)

② 夏目漱石作

「三四郎」より

すると髭の男は、

「お互に憐れだなあ」と云い出した。「こんな顔をして、こんなに弱つていては、いくら日露戦争に勝つて一等國になつても駄目ですね。尤も建物を見ても、庭園を見ても、いずれ顔相応の所だが、いあなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見たことがないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本人の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだから仕方がない。我々が拵えたものじゃない。」と云つてまたにやにや笑っている。

三四郎は日露戦争以後こんな人間に出逢うとは思ひもよらなかつた。どうも日本人じゃないような気がする。

「然しこれから日本も發展するでしょう。」と弁護した。するとかの男はすましたもので「亡びるね。」と云つた。一熊本でこんなことを口に出せば……………

(新潮文庫 P 19)

③ 岡 倉 天 心 著

「茶の本」より

どうして花はかくも美しく生まれて、しかもかくまで薄命なのであろう。虫でも刺すことができる。最も温順な動物でも追いつめられると戦うものである。ボンネットを飾るために羽毛をねらわれている鳥はその追い手から飛び去ることができる。人が上着にしたいとむさぼる毛皮のある獣は、人が近づけば隠れることができる。悲しいかなー翼ある唯一の花と知られているのは蝶であって、他の花は皆、破壊者に会ってはとうすることもできない。彼らが断末魔の苦しみに叫んだとしてもその声はわれらの無情の耳へは決して達しない。われわれは、黙々としてわれらに仕えわれらを受する人々に対して絶えず残忍であるが、これがために、これらの最もよき友からわれわれが見捨てられる時が来るかもしれない。諸君は、野生の花が年々少なくなっているのに気はつきませんか。それは彼らの中の賢人どもが、人がもつと人情のあるようになるまでこの世から去れと彼らに言ってきたのかもしれない。たぶん彼らは天へ移住してしまっただけであらう。

(岩波文庫 P 75 ~ 76)

④ ユネスコ勧告

1. I B E 勧告

中等学校での外国語教育に関する各国文部省への勧告

RECOMMENDATION No. 59 TO THE MINISTRIES OF EDUCATION

concerning

THE TEACHING OF MODERN FOREIGN LANGUAGES IN SECONDARY SCHOOLS (I B E 勧告)

2. 国際理解教育に関する勧告

国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告

RECOMMENDATION CONCERNING EDUCATION FOR INTERNATIONAL UNDERSTANDING, COOPERATION AND EDUCATION RELATING TO HUMAN RIGHTS AND FUNDAMENTAL FREEDOMS (国際理解教育に関する勧告)

(以上の勧告は「新英語教育研究講座」第20巻に所載)

以上